

## &lt;レポート&gt;

## 第6回全環研水環境集会を終えて

平成9年に第1回の全公研水環境集会が札幌市において開催されてから、日本水環境学会年会に併設して集会が実施されてきた。今回、第36回日本水環境学会年会が岡山市で開催されたことに伴い、第6回全環研水環境集会を実施した。

## ・実施内容

主催：全環研協議会

日時：平成14年3月14日（木）

17：30～19：30

場所：岡山大学一般教育棟206教室

テーマ：「瀬戸内海の藻場・干潟を守り、創る技術」

講師：岡田光正（広島大学大学院工学研究科物質化学システム専攻教授）

世話人：山本弘捷（岡山県環境保健センター）

清木 徹（広島県保健環境センター）

土佐政二（徳島県保健環境センター）

林 弘（愛媛県立衛生環境研究所）

全環研会員への参加の呼びかけを2月初めから行ったが、2月末において参加希望者は岡山県を除いて20名程度であった。そのため、会員以外にも参加を呼びかけることとした。心配していた参加人数は集会当日には70名（全環研会員52名）となり、盛況の中で講演が行われた。

第2期科学技術基本計画において国家的・社会的課題に対応した重点分野である「環境」では、「地球温暖化研究」や「ゴミゼロ型・資源循環型技術研究」、「化学物質リスクの総合的管理技術研究」、「地球規模水循環変動研究」と並んで、「自然共生型流域圏・都市再生技術研究」は重点課題となっており、その一環である藻場・干潟に関する研究が国民にとって重要であるという正当性を初めに説明した。

人間活動によって生態系は何らかの影響を受けて壊れているために、本来の生態系はないといってよい状況にある。しかし、人間活動による排水や廃棄物などによる影響をゼロに近づけるためには多量の薬品を使用するなどの莫大なエネルギーを必要とし、その結果として新たに別の影響が発生する。そのため、壊した生態系を人の手によってつくることが必要であるが、干潟の場合において壊した干潟と創った干潟では機能が違ってくる。この違いを緩和するために生息場の環境の制御が必要であるとのテーマに対する考え方についての説明があった。

次いで、広島湾において実施した藻場・干潟に関する研究報告があった。干潟について、自然と人工はシルト含有量や勾配において違いがみられた。自然の土を人工に持って行っても、また人工にゆるやかな勾配をつくっても人工を自然に復元することは難しく、結局、水の流動環境をうまくすることが一番よいということがわかった。藻場について、水中の懸濁物質がアマモの葉の上にたい積したことによる光遮断効果によって死ぬ確立が高く、水の流速の影響が重要としていた。さらに、つくった藻場・干潟といった製品品質の定義や評価、保証(期間)が今後において必要であることを述べて講演を終了した。

テーマについて大きな観点で説明していただいたこともあって、環境分野の研究をしている我々にとって研究に対する考え方の面でも貴重な講演であった。

最後に、本集会に当たり、講演を引き受けていただいた岡田光正教授に深謝致します。

山本 弘捷（岡山県環境保健センター）記